# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　青山弘之　印

学位申請者　　児玉 恵美

論文名　　日常に溢れ出す戦争の記憶―レバノン内戦で失った故郷と家族の想起―

【審査結果】

児玉恵美氏の学位請求論文「日常に溢れ出す戦争の記憶―レバノン内戦で失った故郷と家族の想起―」について、論文審査と口述による最終試験（公開試験）の結果、審査委員会は全員一致で児玉氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、事前審査は 2024 年 11 月 7 日にオンラインで実施され、最終試験は 2025 年 1 月 30 日午後 3 時より約 2 時間かけてオンラインで実施された。審査委員会は青山弘之（主査・副指導教員）、黒木英充（主任指導教員）、床呂郁哉（副指導教員）、西井凉子、鈴木啓之（東京大学特任准教授）の 5 名により構成された。なお、本学大学院生 3 名の傍聴があった。

【論文の構成】

本論文の構成は以下のとおりである。

序章
- 第 1 節　はじめに
- 第 2 節　先行研究の整理と問題の所在
- 第 3 節　調査の概要と調査時の政治・経済情勢
- 第 4 節　本論文の構成

第 1 章　日常に埋もれた爆発事故のトラウマ記憶：持続する不安と恐怖
- 第 1 節　はじめに
- 第 2 節　ベイルート港湾大爆発事故の概要
- 第 3 節　日常に立ち現れる爆発事故の記憶
- 第 4 節　おわりに

第 2 章　喪失した故郷の家をめぐる家族の記憶：レバノン内戦期の強制移動から
- 第 1 節　はじめに―問題の所在
- 第 2 節　レバノン内戦における強制移動
- 第 3 節　強制移動をめぐる家族の語り
- 第 4 節　喪失体験の家族内継承
- 弾 5 節　おわりに

第 3 章　レバノンのパレスチナ墓地における記憶継承：マージド・フサイン・アティーヤの記憶から
- 第 1 節　はじめに
- 第 2 節　解放運動の「殉難者」をめぐる集合的記憶
- 第 3 節　家族の「殉難者」をめぐる記憶
- 第 4 節　おわりに

第４章　パレスチナ難民キャンプに局在する場所の記憶：暴力による痕跡と不在
　第１節　はじめに
　第２節　難民キャンプに住む人々の語り
　第３節　虐殺・包囲攻撃の後に残されたモノ
　第４節　おわりに
第５章　内戦の行方不明者をめぐる想起：ドルーズ派女性の日常
　第１節　はじめに
　第２節　レバノン内戦による行方不明者の概要
　第３節　ドルーズ派女性による行方不明者となった夫の想起
　第４節　おわりに
終章
参考文献

【論文の概要】

本論文は、レバノン内戦（1975－1990年）を経験した人々、および内戦後も不安定な政情に翻弄されつつ生きる人々への聞き取り調査に基づき、個々人が過去の紛争をいかに想起しているか、また紛争期に喪失した故郷と家族に関する記憶がどのように継承され変容しているのかを解明したものである。戦後のレバノン政府では、内戦中の民兵集団等の指導者が政治的実力者として多くの要職を占めたため、内戦の記憶の忘却を促進する政策が採用された。西欧の研究者による本分野の先行研究も、「健忘症」という語を使いつつ、内戦を経験した人々もその記憶を失ったとしてきたが、児玉氏は、調査対象の人々に寄り添いつつ、トラウマをかかえた彼らの記憶の日常生活における不随意的横溢や、喪失した故郷や家族を想起する行為を丁寧に観察し、その結果に基づいて先行研究を批判し、レバノン地域研究と戦争の記憶をめぐる研究の双方に確かな貢献を行ったた。そして、人類学における文化的記憶論や集合的記憶論を援用しつつ、暴力が日常的に遍在した内戦を経験した人々が、戦後の生活実践においていかに「未完の過去」に向き合ったか、および喪失体験を触発する媒介としての「場所」と死者の身体の在/不在の問題にいかに取り組んだかについて、現地調査に基づいて解明した。

【審査の概要および評価】

公開で行われた審査では各審査委員から多岐にわたる質問が出されたが、大きくまとめると、次のような成果と課題が指摘され、応答がなされた。

**（１）レバノン内戦と記憶・想起をめぐって**

リサーチ・クエスチョンとして挙げられている２つの課題、すなわち

(i) 国家による内戦の集合的忘却の下で、人々は日常の生活実践において、内戦時の喪失体験の記憶をいかに想起しうるのか

(ii)レバノン内戦の「国民和解」後の社会で、人々が戦争のトラウマ記憶と向き合わざるを

得ない瞬間に、どのように想起が生じるのか、ならびに記憶を語るという行為によっていかなる状況が新たに生成されるのか

についてはそれぞれ

(i) 内戦後の日常の中で、内戦時に別離を余儀なくされた故郷の家、死亡・行方不明の家族をめぐる喪失感に苦しむ人々の想起が人々の能動性と不随意性のはざまで生じていた

(ii) 人々が内戦中に身体として経験した個人的記憶が、レバノン人の文化に根付いた家や、死者の身体の存在／不在そのものから触発されて溢れ出すかのように、「記憶が語りだす」状況が観察された

という形で適切に答えられている論文であり、結論に至る過程で人類学的記憶論の先行研究を咀嚼・吸収し、心理学分野にまで広げて知見を取り入れる形で、レバノン内戦の記憶に関する先行研究を批判し、のりこえることに成功している。これはレバノン内戦研究、中東地域における紛争後社会における記憶の研究分野における貴重な貢献と認められる。

そのうえで、次のような問題が指摘された。

① 前半の章において分散して説明されるところの、レバノン社会の特異性（多宗教・多宗派性やその下での政治システム、日本の県程度の面積の国土において多数の民兵組織が戦闘を繰り広げ、目まぐるしい国際的介入がなされた内戦であったこと、戦後も旧ユーゴのように分裂することなく対立した人々が「共生」してきたこと等）をまとめて序章で提示すべきだったのではないか。

② 記憶を語る行為は非常によく書かれているが、想起を通じて戦後の国民和解に向けて新たな社会関係がどのように構築されてきたのか、が明示されていない。

これに対して児玉氏の側からは

① については、その通りであり、今後公刊など発表の機会があればそのように対応したいとの返答があった。

② についても、その指摘の通りで、沖縄における戦時の記憶をめぐる冨山一郎編の研究において示されているところの、記憶に蓋をしていた人々が想起し語り始め、そこから新たな平和をつくる基盤が生まれるという議論を参照して、レバノンのケースの考察を深めたいということが述べられた。また、内戦特有の問題といえるような、戦時に敵と認識していた集団のみならず同じ社会の中の他者一般に対する不信がいつまでも解けないという問題点についても自覚していることが説明された。

**（２）現地における聞き取り調査について**

ただでさえ、現地調査の中でも内戦体験やその記憶を聞き取るという作業は容易でない。さらに児玉氏が調査に従事した時期、とりわけ 2021 年 11 月からの 1 年間は、2020 年に始まったコロナ禍が依然収束せず、2019 年後半に始まった経済・金融危機が底なしの状況を呈し、それに伴う政情不安に追い打ちをかけるような 2020 年 8 月のベイルート港大

爆発事件も発生するなど、滞在自体が大きな困難を伴う時期でもあった。そこで現地の家族レベルの人間関係に参与しつつ、個人的な記憶を観察と聞き取りで引き出し、論文にまとめ上げる、という営為自体が高く評価されるべきものである。また、そのような時期ゆえの価値ある情報が得られたとも言える。そのことを前提としたうえで次のような質問が提示された。

① 聞き取りの対象となった人の属性が、マロン派キリスト教徒、パレスチナ人（宗派的にはスンナ派ムスリム）、ドルーズ派（ムスリムの一派に含まれる少数派）であるが、なぜその宗派を対象としたのか、また児玉氏が調査対象者と知り合うに至った過程が判然としない。レバノンにおける宗派個別の人口規模で言えばシーア派が最大である今日、シーア派が調査対象とならなかったのはなぜか。

② 内戦中に一戦士として斃れた父親を殉難者として位置づけるパレスチナ人男性について、その男性と父親との家族内での関係の説明が弱く（「厳しい父であった」といったものに留まる）、その部分がさらに厚く記述されていたならば、記憶と想起をめぐる論述もより深いものになったのではないか。

これに対して児玉氏は

① については、滞在中の人間関係がその範囲であったということもさることながら、1980年代前半の、イスラエル軍のベイルートにまで達した攻撃と占領の後、レバノン中部のシューフ山地から撤退した際に発生したマロン派・ドルーズ派間の村落単位の民族浄化を含む熾烈な「山地戦争」の記憶を両派から聞き出すという目的があったためであると説明した。今後はその後景にあり、一方でパレスチナ人勢力とも対立関係に至ったシーア派の人々の記憶と想起についても調査を企図している旨の説明があった。

② については、調査時の男性から聞き取った言葉の範囲に留まってしまったことは確かであり、今後は家族内の細かな人間関係についても聞き取りをしていきたいとの回答があった。

**（３）今後本研究をさらに深めてゆくための課題**

本論文は今後さらなる発展の可能性があるとして次の点が指摘された。

① 個人の記憶をめぐるメンタルな問題からさらに広がりを持たせて、戦後の国民和解を考える際には、レバノンの多数の宗派や内戦中の民兵集団間の記憶のポリティクスの摩擦を孕んだナラティブの交渉・折り合いが重要な論点となりうる。

② 現在、レバノン人が内戦を振り返って（外国人研究者に）アラビア語で語る際には単に一般名詞の「戦争」（ハルブ harb）という言葉を使うのが一般的であるが、内戦中に人々は、日本語の「出来事」に相当するアフダース ahdath（ハダス hadath の複数形）の語で呼んでいた。これについては、レバノン人政治社会学者による内戦・暴力論に関する先行研究を引く形で児玉氏も使用しているが、内戦中の暴力の記憶を論じる際には、「出来事」という脱文脈的・脱因果関係的な言葉が使われてい

たことの意味を掘り下げる必要があるのではないか。

これに対し児玉氏は

① については、様々な政治的背景を持つメディア（特に新聞）における当時のナラティブを分析することで、より深い考察を目指すことが述べられた。

② についても、今後の課題とすることが述べられた。

以上、いくつかの課題は残すものの、先行研究をのりこえるための課題設定、困難な調査の遂行能力とその成果、そして学術論文としての完成度をふまえて、児玉恵美氏の博士（学術）の学位授与は妥当であると、審査員全員が一致して認めるものである。